## ①
## 老後は外国暮らし？そんな期待もいつしか夢に
### Golden Agers' Expatriates

**【海外開運】**国民はいま、サンデー毎日をやってる年金族を方々で見かけるから、年金滅亡の危機感覚に情けないほど、うといが、こんな結構な老人生活は早晩、古き良き時代の遺物と化す。考えてもみたまえ。２０年前、社会保険証さえあれば病院代がゼロだった。ところが現在では本人でもすぐ万札が飛ぶ。それと同じだ。

都市型サラリーマンは自家農園をもたない。だから自給食品はゼロ。食費にもこと欠く日々がすぐに来る。さらに年４回来る総額３０万ちかい固定資産税が払えない。雇用保険と年金とのつなぎに自己資金の大半を遣いきり、貯金はその時点で底を突く。残りは１００万程度か。仕方なく持ち家を売って、借家へ。その家賃もすぐ未納状態に。公的老人ホームは満杯。どことも１５年待ちから２０年待ち。観念して老妻と露営、つまりホームレスになるだろう。

まさか、そんなこともやれん。いっそ国外へ行くか。

ということになるわけだが、持参金なしの外国暮らしは、現在のオーストラリアのように、どこもビザを発給しなくなるだろう。バリ、タイ、ニュージーランド、オーストラリアで悠々と、の夢は夢として消え果てる。いまやれているのは、年金がいいからだ。年金が下がれば外国勢はみな門戸を閉じる。





ビザ発給の審査基準は、持ち金次第ということをご存じか。持ち金も年金も微少になったら、外国で暮らすチョイスもなく、仕方なく物価高の日本にへばりつくほかない。それにたいする公的援助は、もちろんゼロ。

これが経済成長期に営々と働いてきた日本のサラリーマンの末路である。怒っても憤慨しても仕方がない。役人第一国家ではどこも同じだ。民間会社出身のご老人たちがプラカードもって省庁に押しかけてみても、無視されるだけ。あわれで見てられない。ましてや個人のレベルではどうしようもない。

年金が危ないだと？　危ないのではない、もう、絶対に頼れない、と覚悟せよ。賽は投げられた。腕をこまぬいて傍観していては、やがて自分自身が火宅の人となる。個人経済の戦争の火ぶたはすでに切られた、と判断せよ。もう、うかうか時を過ごすときにあらず。一家が総出で生活防衛に徹するときだ。年金枯渇は個人にとって、これほど痛烈な経済恐慌もない。本人やその妻が老後に困るばかりか、その息子にものしかかってくる。それをじゅうぶん認識させて、家族中で生活防衛を徹底させるほか、生き残るすべはない。